

平成26年度活動報告書(1/5)

学部・委員会名	生物産業学研究科
学部長・委員長等氏名	研究科委員長 中川 純一
担当所管	学生サービス課
テーマ	生物産業学研究科大学院生定員確保

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
生物産業学研究科では大学院生物産業学研究科定員修士が21名、博士後期が8名定員となっていて、これを満たすことが目標であった。また修了後の進路の可能性を知らしめることも目標とした。大学院指導教員一人に院生一人ということも目標としていた。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
まず大学院研究発表会の場合での学部生への研究紹介と説明をさらに促すことを計画した。また学部低学年からの確保のため入学年次からの研究室に所属させる試みを一部専攻でスタートさせることを計画した。入試に関する英語補修を充実させることを計画した。大学院発表会は成功で多くの学部生の参加があり院生との交流が生じた。飛び研を食品香粧学専攻で開始、意欲ある学生が育っている。
3. 達成度を判断するための指標
定員と実際の入学者の数が同じであれば5とする。
4. 成果・評価
■成果 院生の研究内容を学部生へ紹介と説明を行う「大学院研究発表会」を行い、ポスター形式で院生と学部生が直接テーマに関して質疑応答できるイベントを実施した。学部生に研究の魅力を感じて貰い進学意欲の促進と院生の発表力強化にも期待できた。修士課程は定員を満たしており、試験合格者数も定員以上であった。博士後期について、在籍18日は定員のほぼ2/3であるが、来年度入学者が現時点で1名であることが課題として残った。 ■評価（5～1で記載してください） 3 方針に基づいた活動ができた 大学院研究発表～53名（M1年13名、M2年22名、D1年4名、D2年6名、D3年8名） 修士論文発表～22名（生産専攻11名、777専攻5名、食品専攻5名、産経専攻1名） 学位（博士）論文発表～6名 I期試験～博士前期課程志願者22名（生産専攻5名、777専攻13名、食香専攻4名）、博士後期課程志願者1名 II期試験～博士前期課程志願者6名（生産専攻2名、777専攻1名、産経専攻3名）
5. 課題及び改善事項
平成26年度においてはI期試験及びII期試験対象者へ各専攻合同説明会を2回実施し、専攻毎の研究紹介・説明等を実施し、進学への動機づけを行った。また、入試情報等についてはHPへ掲載し、広く情報を公開することが今後も重要となる。
6. 平成27年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成26年度活動報告書(2/5)

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中川 純一

担当所管 学生サービス課

テーマ 大学院就職試験活動の向上

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
大学院就職についての支援体制を向上させ、院生が参加できるキャリア教育の機会を増やすことを目標とする。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
26年度から大学院生向けのキャリア予算をくみ、大学院特化セミナーを開催する。インターンシップの検討をする。大学院キャリア担当教員を増強する。
3. 達成度を判断するための指標
就職率平均75%超えを目標。大学院キャリア教育の実施を目標。
4. 成果・評価
■成果 大学院特化キャリアセミナーを前後期それぞれ2コマずつ実施した。就職率は修士が77.8%。博士後期は1人が国立大学専任教員、ポスドクが3人、未定2人の66.6%であった。また博士後期院生がインターンシップ1件を行った。 ■評価（5～1で記載してください） 4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた。
5. 課題及び改善事項
博士後期院生の就職率が良くない。またとりあえずの流動研究員はあっても、正規採用は難しい。 これは今回企業をめざしているものが少ないということにもよるが、研究職を目指す博士一般の全国的な傾向でもあり、抜本的な解決は一大学の工夫だけでは難しいところもある。
6. 平成27年度への継続の有無
有り

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成26年度活動報告書 (3/5)

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中 川 純 一

担当所管 学生サービス課

テーマ 国際発信力の向上

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
国際的発信力の育成。英語での発表・ディスカッション。継続的な努力の基盤作りの推進。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
修士修了試験として英語でのテーマ要約の義務化と強化。大学院中間発表会のポスター展示で博士後期院生には英語の abstract 提示の義務化。国際学会での発表、国際学術誌への投稿の促進。
3. 達成度を判断するための指標
ポスター発表会の英語の実施度。専攻別の国際学会、国際誌への投稿数。
4. 成果・評価
■成果 ポスター発表会では、博士のみならず修士も全員が英文要旨を作成した。このことで修士の英文作成力は個々の指導教員の薫陶を受けたのは明らかである。国際学会発表は5件、国際誌掲載は7報と健闘した。当初の計画にはなかったが、フィンランドやノルウェーの研究者を招聘して、英語での講演を学部生の一部と大学院生の全員に参加を促し、レポートを書かせた。 ■評価（5～1で記載してください） 4 方針に基づいた活動ができ、目標が概ね達成できた
5. 課題及び改善事項
大いに改善されたが、実力の育成には少し間がある。更に英語に触れ、発表する機会を設けたい。
6. 平成27年度への継続の有無
有

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成26年度活動報告書 (4/5)

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中川 純一

担当所管 学生サービス課

テーマ 研究科横断型・地域連携型研究の促進

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
生物産業学研究科4専攻が協力して、産業貢献型、地域貢献型のプロジェクトの起案を奨励し、実現させたい。フードマイスター、地域創生塾などの実学直結の試みを大学院活動と連携させ、教員と院生に意識を持たせてテーマ創出を目指す。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
小委員会メンバーを中心として、横断型テーマ作出の可能性を探るミーティングを行う。企業との共同研究の実態調査をして大学院教員全員が共有できるような形を探る。
3. 達成度を判断するための指標
既存のテーマの維持、新たなテーマの開拓の数。
4. 成果・評価
■成果 既存の地域創生については継続した。新たな動きとしては4専攻合体型でなく、地域企業と1専攻や個別研究室との連携が生じた。 ■評価（5～1で記載してください） 2 方針に基づいた活動を行ったが、目標に対する達成度が不十分で、改善すべき点が多い
5. 課題及び改善事項
いきなり4専攻合併型という目標設定にやや無理があった。まずは1～2専攻を繋げるという形が現実的と思われる。
6. 平成27年度への継続の有無
無し：現状から別の模索を考えていく方針で、ひとまずこの件はペンディングとする。したがって27年度計画案は作成しない。

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。

平成26年度活動報告書 (5/5)

学部・委員会名 大学院生物産業学研究科

学部長・委員長等氏名 中川 純一

担当所管 学生サービス課

テーマ ディプロマポリシーの実現化

※テーマは、具体的な計画・実行・点検・改善のためのPDCAサイクルの基本単位です。

1. 目標（改善点や実施の背景となる事由、達成したい目標など）
高度な技術と学問レベルを涵養し、各専攻の専門分野を柱としながら、問題設定と解決能力を備え、生物産業全体を見渡せる実行力とリーダーシップを持った人材の育成を目標とする。
2. 実施計画（具体的な方法・手段とスケジュールなど）
大学院FD委員会を強化して小委員会と別に毎月1回程度開催し、カリキュラムの点検と見直しを行う。学生による授業評価、研究指導評価を回収して、一覧にして、全教員に配布し、教員の授業実施記録も併せて公開し、問題点があれば明確にし、改善策を考えられるようにする。
3. 達成度を判断するための指標
大学院FD委員会の開催。授業評価、研究指導評価、授業実施記録の一覧作成と開示。
4. 成果・評価
■成果 大学院FD委員会は事実上機能しなかった。一方、授業評価、研究指導評価、授業実施記録はほぼ100%回収され、次年度4月の委員会で開示された。 ■評価（5～1で記載してください） 3 方針に基づいた活動ができた（目標は7割位達成）
5. 課題及び改善事項
大学院カリキュラムはFD委員会ではなくて、専攻内の教員構成の変化などによってむしろ自発的に検討されていて、これらが総合的に吸い上げられる形には至らなかった。改善ポイントを明確にするとところから仕切り直しと考えられる。
6. 平成27年度への継続の有無
有り

※添付資料がある場合は、資料名、資料番号を記載すること。